

## 2022年度 独創的研究助成費 実績報告書

2023年3月30日

報告者	学科名	看護学科	職名	教授	氏名	森永 裕美子
研究課題	育児中の父親の仕事観と子ども観の関連と育児時間への影響					
研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	森永 裕美子	保健福祉学部 看護学科・教授	公衆衛生看護学	研究総括、研究進行管理、論文作成支援	
	分担者	西川 萌菜	保健福祉学研究科看護学専攻	広域看護学講座	研究進行、データ収集、データ分析、論文作成	
		清野 花奈	保健福祉学研究科看護学専攻	広域看護学講座	調査協力、論文作成支援	
研究実績の概要	<p>【背景】</p> <p>育児期にある男性の一日の育児時間は49分に留まり、母親はその4.5倍の育児時間となっている現状がある（厚生労働省）。父親の育児参加といわれて久しいが、父親の仕事と育児の両立には困難さやストレスが生じている（頭川2008）。仕事と育児の両立を考えたとき、仕事を優先しがちな価値観であれば、仕事を理由として育児への積極的な関わりには至らないのではないかと考えた。一方で子どもにとらえ方、親愛性によっては、育児期においては子ども優先・育児優先と考える価値観もあると推察できる。これまでに仕事に関するとらえ方（仕事観とする）と、子どもにとらえ方（子ども観とする）はどのように関連しているのかということとは明らかになっていない。</p> <p>したがって父親の仕事観と子ども観との関連を明らかにし、それらが育児時間に影響しているのであれば、仕事と育児において優先度をおく価値観を踏まえた育児支援策のマネジメントを行うことにより、育児への関与が増え、ひいては育児時間の伸びにつながると考えられる。</p> <p>【研究方法】</p> <p>岡山県内の保育園に通う3歳児の子をもつ父親を対象に、質問紙調査またはオンライン調査を行った。調査内容は、基本属性、平日・休日の育児時間、仕事と育児の両立における父親のストレス、仕事観・子ども観（福丸ら1999）とした。</p> <p>分析は、父親が抱く仕事観や子ども観を独立変数、父親の育児時間（平日・休日）を従属変数として重回帰分析を実施した。本研究は研究課題「仕事と育児の両立における父親のストレスの実態と仕事観・子ども観との関連」の一部として岡山県立大学倫理審査委員会の承認を得て実施した。（受付番号：22-02）</p>					

<p>研究実績 の概要</p>	<p><b>【結果】</b></p> <p>配布数 1,999 件のうち、有効回答数は 721 件（有効回答率 94.2%）であった。平日の平均育児時間は 2.0 時間で 1～2 時間が最も多く 58.2%、休日の平均時間は、6.7 時間で 3～5 時間が最も多く 45.6%、8 時間以上も 39.3%あった。</p> <p>仕事観の「制約・負担」が強い父は、休日の育児時間が長くなる傾向があった。「仕事中心」の父は、平日、休日共に育児時間が短かった。仕事を「義務」として仕事を捉えている父は、平日の育児時間が短かった。</p> <p>仕事に「充実・自己実現」を感じている父は、休日の育児時間が短い傾向であった。また、子どもがいることで「充実感、楽しみ」や「生きがい」を感じる父は、休日の育児時間を十分にとっており、逆に「制約感、負担感」を抱く父は、平日・休日の育児時間をとる傾向があったが、子どもに対して「無関心・低価値」の父は、休日の育児時間が短くなっていた。</p> <p><b>【考察】</b></p> <p>仕事をすることに肯定的であり、育児より仕事が義務感的にも優先順位を上とする父の場合、当然育児時間が短くなる。しかし仕事によって時間や自由、家族時間を奪われるという制約・負担感を抱えながらも仕事より育児の優先順位が高いとする父は、平日は無理でもきちんと休日に育児時間を確保しようという意識が働いていると考えられた。また、子どもがいることで制約感や負担感を抱く父は、子ども中心に考えるからこそ、子どもにかかる時間として育児時間が当然長くなっており、時間の割き方で制約・負担感につながっていると考えられた。</p> <p><b>【結論】</b></p> <p>仕事と育児の両立を考えたとき、仕事を優先しがちな価値観の父は、仕事を理由として育児にかかる時間が短くなり、子どもを中心とした価値観の父は、仕事をしつつ平日にも育児にかかる時間をとるために、仕事と育児の両立におけるストレスにつながっていた。育児中の父の育児時間は、父の仕事観と子ども観によって影響するため、父の価値観を見極めた父への育児支援策をマネジメントすることの必要性が示唆された。</p>
<p>成果資料目録</p>	<p>なし。</p>